

後宮の寵妃は 謎解きよりも料理がしたい

空岡立夏 Soraoka Rikka



アルファボリス文庫

一、月花

「なに、そう構えるな。形だけの皇后だ。そなたが毒の謎を解いた暁には、廃妃にして、そつと逃がす」

目の前の男によつてもたらされた青天の霹靂に、李月花は言葉を失った。

青い空はすっかり乾ききり、こんな日には熱いお茶と干菓子がよく合うだろうと天を仰ぐ。

そもそもこうなる予感はあるにはあった。

しかし、よりにもよつて皇后の位とは。

事の始まりは七日前、あの男を助けたことから始まる。

*
*
*

甘みを醸すのは丸いネギだろうか。生姜とニンニクの力強い香りもする。極め付き

の十種類の香辛料が鼻を抜ける。

それらを取りまとめるのが赤い実と牛の乳の汁。赤色に少しの黄色が混ざった美しい橙には、鶏肉の油が赤々と浮かぶ。

ニンニクの香りと香辛料の香りが鼻腔をくすぐり、部屋に充滿するのにまったくしつこくは感じない。爽やかで、かつ食欲をそそるたまらないにおいに満たされて、周りの人間も頬が落ちんばかりに笑っていた。

ここは溪国の外れにある小料理屋。都から五里（約二十キロメートル）離れているのにいつも席は満席で、昼飯時は行列ができるくらいだった。

この店を切り盛りするのは男主人だ。しかし西域の衣——ターバンで顔を隠しているから、その主人の素顔を知る者はどこにもいない。

西域というのはここ溪国から百里は西にある地域のこと、溪国でも信仰されている宗教の始まりの地とも言われている。

さらりとした暑さの西域では、暑さしにぎに香辛料やニンニク、生姜を効かせた料理が発達したのだとか。

ここ溪国でもニンニクや香辛料は発達したが、それらは暑さをしのぐというよりは、寒さに耐えるための知恵だった。

この店の売りは西域の汁物であるカリ。そして付け合わせは客各々によって別の

ものが出される。この付け合わせがミソなのだ。

この男主人は、客が入ると注文より先にその人間の生年月日を聞いてくる。一体なにに使うのか、気にする者ももういなくなった。

この国の元号は今論。千五百年続いた溪国の王朝の七代目である。

現皇帝は若くして国を継いだばかりで、まだ十八のうら若き皇帝なのだという。男主人とは同い年だ。

若さゆえかその性格は冷淡と噂され、しかし民を思う気持ちは歴代一と評判だ。こうして都から五里離れたとはいえ、西域や世界各国の料理を出す店が増えたのは、ひとえに現皇帝の懐の深さの表れだろう。

この店のカリは日によって赤い色の時もあれば、鮮やかな緑の時もある。

共通するのは、そのいずれもが頬が落ちるほどに美味しく、辛さの極みへといざなうことだろうか。

香辛料の香りは鼻だけでなく、口を含むと舌から鼻に抜けて清々しい。甘みを出す九いネギは、なにか特別なことをしているのか、辛さがなくなり甘さが際立つ。

「この、主人を出せ！」

今日も平和な昼下がり、そろそろ昼の分が売り切れるであろうその時刻、とある男が小料理屋に押しかける。

髭を蓄えた四十歳ほどの恰幅のいい男だった。

しかし、顔がげっそりとこけて、唇はカサカサに乾いていた。

顔から生気が抜けたかのような男は、怒りに任せて店の戸をくぐり抜けたのだった。「この料理を食って、食中毒で腹を下した！ どう責任を取ってくれる！」

その時は店内の客はほとんどはけ、残るは料理の出来上がりを待つ一人のみであった。

その一人の客は外套を頭からまとい、顔はまるで見えない。

怪しいことこの上ないが、この店に来るものはこういった訳も多い。

飛び込んできた男は客など気にもとめず、奥にいる男主人を怒鳴りつけた。

訪れた男に、最後の客は息を吐く。

「せっかくの馳走が、不味くなるではないか」

男主人が厨房から出てくる。

だいた背の低い男だな、と客人は思った。

ターバンを頭に巻いて、顔も隠しており、男からも客からも、そのかんばせはわからない。わからないのだが、男が口を開いた。

「返金、いや、今日働きに出られなかった分の賃金を保証しろ！」

「俺の店の食事が原因か？ 食中毒とは、どんな症状で？」

男主人の声は高く、女という方が自然だった。嫌味なく声音は明るい。

なら動揺しないのは、自分の料理への誇りだろうか。

男が腹を抑えて、男主人にかみついた。

「吐き気と下痢。頭痛もする」

「さようですか。ですが、ほかのお客さんはなんともない。それを見るに、ほかの食物で食中毒になったのでは？」

男主人が冷静に返す。

至極真つ当な答えに、客はふむ、と頷いた。

度胸もある、料理もうまい。この男主人は、なかなか大したものだ。

しかし男は考える素振りすら見せず、言葉を返す。

「今日は芋をふかしたものと、ここの昼飯しか食ってない。となれば、ここの飯のほかにあるまい」

「芋を？ なんの芋です？」

「ジャンカルから仕入れた、庶民が食ってる、腹ふくらましの貧しい芋だよ」

うむ、と今度は男主人が頷く。

この男が言っているのは、最近この国にもたらされた、『じゃが芋』のことだろう。だとしたら、この男の症状には、当てがある。

男主人はそのままずっと男に寄る。

「じゃあ、その芋を見せてくれませんか」

「ああ、いいとも。なんの変哲もない、ただの芋さ」

その足で、男の家に向かうこととなった。

最後の客人は、ほうっと男主人を見ている。にやにやと言った方が正しいかもしれない。

そして席を立ち上がり、今度は貼り付けた笑みを男主人に向けた。

「時に、ご主人。わたしも一緒にしてよろしいか？」

「お客さん？ 一緒に来たってなにも楽しいことなんてないですよ？」

「いや。ご主人が帰らねばわたしのカーリーが作ってもらえぬゆえ。それに、お手並み拝見（はいけん）と思うって」

「お手並み？」

「いや、こちらの話だ」

そうして、男と、男主人と客人の三人で、男の家へと向かうのだった。

* * *

冬の空はだいぶ寒く、三人は体を震わせながら男の家へと案内される。

簡素な家は、暴風雨が来たら今にもバラバラに崩れそうだった。

だが、庶民ならなんら珍しいこともない。

この国の皇帝がいくら善政をしようとも、そう簡単に下々の生活がよくなることはないことは、皇帝をはじめとした誰もが知っていることだった。

男は厨房に残る蒸かした芋を、男主人にこれ見よがしに渡した。ザルに二十ほど載（の）った、小さな芋だ。

「これ以外、今日は食べていない。芋で食中毒なんて、聞いたことがない」

「いいえ、原因はこれだね」

男主人は芋をひとつ掴（つか）みとり、一口口に含んだだけで、断言した。

含んだ芋はすぐに吐き出し、男主人は、うん、と頷く。

しかし男にしてみれば、なんの変哲もない、じゃが芋だ。これのどこがおかしいのか。

いよいよ男は怒りだして、男主人の胸倉を掴んだ。その瞬間、男主人のまといっていた西域の衣がはらりとほどけた。

現れた出で立ちは、柔らかな長い黒髪をまとめあげた、薄い茶色の瞳（ひとみ）が美しい女だった。

これには客も驚いて、口を開いて主人を眺めていた。

「女……？ ご主人、あなた、男だとばかり」

「いつ私が男だと？」

「だが、いつもは自分を『俺』と」

「それだけで私を男と断ずるには、いささか軽率すぎますね」

うろたえる男に、くつく、と一緒に来ていた客の男が笑った。

主人と男は客の男を見やる。まるで幼子がおもちゃを与えられた時のような、無邪気な笑みだった。

しかしこの客人、育ちがいいのか肌艶はだつやも髪かみの艶もよく、背も高くて体格がいい。顔が見えずとも、高貴な人間であることは、主人にも男にも予想がついた。

客人が主人を真っ直ぐに見据える。

「ご主人……いや、そなたの名前を聞いておこう」

「お客さんはいったいなにがしたいのやら。名前くらい、別にいいですけど。月花と申します」

「月花。うん、月花。それで、この芋がなぜ食中毒の原因だと？」

「はい、青いんです、どれも」

確かによく見ると、芋は小さなうちに収穫され、そのどれもが、青い。

青い、というのは緑色という意味で、庶民はしばしば、売り物にならない、畑の土から出てしまった青い芋や、芽が出た芋を処理して食べるのだ。

青くなるのは主に太陽に晒さらされるせいで、月花はこれが原因なのだと男に告げた。

「この芋の青い部分と芽には、毒が含まれるのです。そしてそれを食べると食中毒を起こす。そっちの男性のような、腹痛と吐き気と頭痛。これらはこの芋の典型的な毒の症状です」

月花の言葉を信じたい男は、月花をにらみ見ている。

ほかの村人は大丈夫であったのに、なぜ自分だけ。

「信じられるわけがない。この芋が毒だ？」

そう言う男に、月花はふうと息を吐き出した。

「はい。そう言ってます。そもそも、私の店の食事を食べたほかの人がなんともないのですから、あなたが食べたほかのものが原因であることは明らかです。そしてこの芋の毒は水溶性。茹ゆでれば多少は流れるので食中毒にはなりませんし、芽は深く取れば問題はない。しかしあなたの芋は、蒸したものだし、芽もこそげただけです」

しかし男はかたくなに認めようとはしなかった。

「食中毒の原因は店の料理に違いない、そうだ」

とつぶやき、月花の言葉など聞かない。

月花はだんだんと面倒になってきた。

こういう人間には、さっさと返金するのが得策ではある。

しかし、それをしてしまえば月花の店の評判は落ちる。

人の噂ほど恐ろしいものはない。飲食店は信頼で成り立っている。

似たような騒動は今までにたくさん見てきたし、だから邪険にもできなかった。

月花が思案していると、客人がひよいと青い芋を口に入れた。

むぐむぐと咀嚼する客人に、月花が慌てて手を差し出した。

「あ……！ だからそれは毒で！ 吐き出してください！」

「よい、わかつている。だからこそ、だ。わたしがこれを食べてこの男と同じ症状になれば、そなたの疑いも晴れるのだろうか？」

「だからって……はあ」

客人の動きは早かった。

月花が止めるまでもなく残っていた子芋を十五ほど食べ終えて、どしんとその場に座り込んだ。

食中毒は早ければ四半刻（三十分）も経たずに症状が現れる。今回は大量に芋を食べたから、そう時間はかからないだろう。

月花は頭を抱えて客人を見た。

しかし客人は気にすることなく、男の方を見る。

「わたしはまだ、あそこの料理を食べていない。そなたが怒鳴り込んできたゆえに食べ損ねた。ああ、本当に腹が減っているから恨めしい。これで証明出来たらどうしてくれよう」

「はっ、お前、この主人と仲間か？」

男が問うと、月花が「とんでもない」と答えた。

月花が身振り手振りをまじえたことで、男は余計に怪しんで月花をしげしげと見た。ぐるる、と男の腹が鳴り、男は腹を抱えて痛みに耐える仕草をする。

そんな男に、月花は言う。

「この方は常連ですけど、それだけの仲ですよ」

「常連？ 外套をまといっているのに、わかるっていうのか？」

「はい、最初に生年月日をお聞きしているので、大体は。この方のお生まれは、癸未^{みづのえ}の年（一五二三年）、戊午^{ぼしご}の月（七月）、戊申^{ぼしん}の日（二十一日）、戊午^{ぼしご}の時（十一時五十五分）です」

「合っているな」

「こちらの方……名前は知らずとも、生年月日は嘘^{うそ}をつきません」

月花がそう言うのと、客人はふと気付いた。

「ああ、名前か。わたしは雨流」
 「雨流さん、道理で五行が揃っていると思いました」
 「五行？」

「はい、私のお店の付け合わせは、個人個人に合わせたものを出していることはご存じですね？」

ある人には塩辛いものを、ある人には酸っぱいものを。

他の客に出されるものを見ているから、雨流はそれを知っていた。

おおよそ、その人の苦手とする味付けの料理を出している気がするのだが、どうにも、普段は食べないそんな料理が、まるで別物のように美味く感じるのだ。

例えば、雨流の付け合わせは、いつも塩辛いものが多かった。

特にみそ汁は興味深い。

カレー以外にも月花の店の料理は豊富で、煮物や焼き魚にはみそ汁がよく合う。

雨流は月花の店のカレーがお気に入りだが、それ以外であればみそ汁が特に好きだ。塩辛さの奥にある甘みと、感じたことのない海藻や魚の味が混じって調和している。具材に野菜を入れるのもいい。時には豆腐や油揚げなど、豆の加工食品も入れるのだから驚きだ。

その、月花の料理には秘訣があるらしい。

それを察した雨流は前のめりに月花の話に聞き入った。

「ええと、雨流さんの付け合わせには、火を抑える五行、つまり水の食物を取り入れているんです。水は鹹味。塩辛いものですね。これらを決めるのは、生年月日から五行の過不足を出しているんです」

つまり、占い——月花の考え方の基礎になっている四柱推命と同じ原理だ。
 雨流の命式と五行を表にすると、こうなる。

天干	地支	天干	地支
年柱…癸↓丁	未	正財	劫財
月柱…戊↓丙	午	比肩	印綬
日柱…戊	申	——	食神
時柱…戊	午	正財	印綬
土	火	——	帝旺
		正財	帝旺
		印綬	病
			帝旺

簡単に言うと、生まれた年、月、日、時——四柱を、十干十二支の組み合わせで表したものが命式。そこから導かれる命運や性格、才能を紐解く、というのが四柱推命のおおよその考え方だ。

基礎となるのは、他者から見たその人そのものの、性格や外面を示した「天干」。対

照的に他者から見えない内面、本質を示した「地支」。加えて、自分が持つて生まれた強みや才能を表す「天通変」「蔵干通変」「十二運」。

特に生まれた日から導かれる日柱はその人を表すとされていて、雨流の場合、戊申ぼしんの部分ぶんがこれにあたる。

これらはいくつもの組み合わせがあり、とても複雑で、四柱推命の習得までに長い年月を要すると言われている。

そんな四柱推命は、陰陽五行とも深く関わる。

陽と陰、つまり男と女、太陽と月、燥そうと湿しつ。すべてのものは陰と陽に分かれる。

五行ごうというのは、木もく火か土ど金こん水すい。

これらは相生そうせいの関係と相剋さうこくの関係で五芒星ごぼうせいができる。

木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生じる。

また、木は土を剋こくし、火は金を剋し、土は水を剋し、金は木を剋し、水は火を剋す。十干十二支はそれぞれ五行を持っていて、その関係から四柱を読んでいくのだ。

さて、ここで改めて雨流の五行を見てみると、火が多く、水がない。

木は酸味で肝臓かんぞうと関連し、怒りを表す。火は苦みで心臓を表し喜び——興奮を。

土は甘みで脾臓ひぞうに関連し憂いうれを表す。金は辛味で肺はいに関連し悲しみを表す。水は鹹味かんみで腎臓じんぞうに関連し恐れを表す。

先程、雨流の名前を聞いた月花が、五行の均衡が取れていると言ったのは、雨流の名前に水が入っていたからだだった。

雨流の親は恐らく、五行を加味して名前をつけたのだろう。

雨流は夏の生まれだから、本来なら夏にちなんだ名前をつけるのが普通だ。

そういった点では、雨流はやはり高貴な生まれなのだと思う。占いで名前を考えるのは、貴族たちのやり方だった。

月花は男の方を見る。

「そっちのお客さん」

「爆だ」

「爆さんは、水と木が過多だったので、それを剋する土の甘味と金の辛味を中心にした付け合わせを出していたんです」

しかし普段の食事で、芋ばかり食べていたのでは、今度は土が過多になって、憂いうれが強くなるだろう。

辛味はカリ―にも使われる唐辛子で補えるとしても、過ぎたるはなお及ばざるがごとし。

五行は中庸ちゆうちゆうを良しとする。多くても少なくてもだめだ。

いくら月花の店で五行の均衡を取っても、普段の食生活までは管理できない。

爆は芋や粟などの炭水化物ばかりの食生活で、五行が崩れていたのだろう。こうして月花の話を信じられないことが証拠だった。

すると、爆がなにかに気付いた。

「ああ、ん？」

「どうしました？」

「いや……」

爆が雨流を指差す。

月花が爆に説明をしている間に、雨流の顔がみるみる青く染まっていく。

しまいには、爆の家の厠かわやを借りて、出てきた時には脂汗をかいていた。

背中を丸めて腹をさすり、雨流は死にそうな面持ちで帰ってくる。唇がカサカサで、爆と同じ症状だった。

爆が驚き月花と雨流を見やる。

雨流が苦しそうに口を開く。

「どうだ、食中毒の原因は、この芋だと証明できたか？」

「う……そんなはず」

「そんなはずもなにも。わたしが今日食べたのは、この芋だけだ。そなたのせいで、カリーを食べ損ねたからな。うつ……」

雨流は口を押さえて、今一度厠へと走った。背中をできる限り丸めるのは、高貴な人間でも変わらないらしい。

月花はあとで、雨流に砂糖水を飲ませようと思った。水に酢と砂糖と塩を混ぜたものだ。人は吐き下すと体の体液の均衡が崩れる。

心の臓に負担がかかるから、吐いたあとは砂糖水を飲ませるといいのだ。

厠から聞こえる雨流の呻うなき声を背景に、爆はすまなそうに月花に頭を下げて、月花はフルフルと首を横に振った。

太陽の光が月花の黒々とした髪の毛を美しく飾り立てた。

「お礼なら、あの雨流さんに。身を張って証明してくれたのですから」

雨流があらかた落ち着くまで、月花は厠の外で雨流を待った。

その間に爆から厨房を借りて、砂糖水を作っておいた。

* * *

雨流と連れ立って、来た道を引き返す。竹筒に入れた砂糖水を飲みながら、雨流はまだ猫背で歩いている。

腹がしくしく痛むらしく、月花は雨流に合わせて歩幅を狭くした。

食中毒が辛いということは知っていただろうに、雨流が体を張る理由が月花にはわからなかった。もう、今日はカリードころじゃないだろう。

月花は雨流をちらりと見やる。

外套を頭からかぶるようにまとうせいで、どんな顔なのかは見たことがない。

しかし、ここ半年、定期的に月花の店に訪れる常連客なのは確かだった。

生年月日から見たこの青年は、火の気が強くてどうにも頭に血が上りやすい性格に思えた。

実際、最初の頃ときたら、注文から品物が運ばれてくるまでの数刻でさえ、耐えられないように貧乏ゆすりをしていた。

いらつきを隠すことなく、机を人差し指でとんとんと叩く。

周りの客の話し声がうつとうしいのか、耳を塞ぐこともあった。つまり、火の気が多いため神経が興奮状態なのだ。

だから月花は、付け合わせに水の気を多く含むものを取り入れた。

塩辛いもの、漬物や塩辛などの塩蔵品、みそ汁、そして、カリの味付けもやや濃いめにした。

それに、この青年は木の気も不足していたので、酸味のあるもの、隣国のキムチなどは塩気と酸味の両方を取り入れられてちょうどよかった。

隣国のキムチは、ニンニクや山椒さんしょうで漬けたもので、唐辛子は使われていない。

唐辛子は溪国でも外来からもたらされたばかりで、今のところ使える料理は限られていた。

その唐辛子が、月花のカリにはふんだんに使われている。

白色のキムチは保存食のため塩気は多いし、発酵食品だから乳酸菌の酸味もきいている。雨流にはちょうどいい食べ物だった。

漬物は発酵に際して乳酸菌や酪酸菌らくさんきんが増えるから、酸味が出るし、腸の調子を整える。腸は金が司るものだから、五行の均衡はさらによくなる。

木火土金水、これらを同じくらい、同じ量、取り入れることが、月花の学んだ料理の秘訣だ。

これらは薬膳やくぜんに近い考え方だ。

薬膳との違いは、月花が生まれ日から五行の過不足を見るのに対し、薬膳では患者の体の症状を見て五行の過不足を見ていくところだ。

そして雨流としても、この付け合わせを食べるようになってから、自身の性格がだいぶ落ち着いたのだから、この店の秘密が知れたかった。

それが、今日先ほどの爆という男の食中毒の件で、種がわかった。

雨流はげっそりとこけた頬で、月花を見て、笑った。

そんな雨流に、月花は不思議に思う。

やはり雨流は美しく、なぜ月花の料理屋に来るのかまるでわからない。

高貴な人間は、月花のような小料理屋は好まず、贅沢三昧な妓楼に行くのが常だった。

「そなた、食中毒に詳しいようだな」

「いえ、芋の食中毒は有名な話で」

「だが、あれはわたしも知らなかった。そなた、もしか、もやしが食中毒の原因になる理由を知っているか？」

「もやし……？ あれは、日を当てずに育てた大豆ですので、育てた環境によつてはそういうことも——例えば、水を適宜取り替えなかったとか？」

もやしは水を吸わせてからよく洗い、陽光を遮蔽した器で育てる。毎日水を取りかえ、なおかつその際は水の濁りがなくなるまで振り洗いするのが安全に作るコツだ。

「いや、それはない。育てるところから出荷まで、徹底した衛生管理をしている」

「うーん、ならば、もやしに見せかけた、誤食ですね」

「誤食。そなた、見たらそれがもやしでないかわかるか？」

雨流がやけに前のめりに聞いてきて、月花は後ずさりする。
なにやら、面倒なことを押し付けられそうな気がしたのだ。

しかし雨流は月花の目を真っ直ぐに見て、どこか切羽詰まっているような雰囲気さえあった。

外套の奥に光る瞳は、月花と違ってやや紫色がかっていて、紫水晶のように美しい。もしやこの青年は、水晶の精なのではと思わせるほどのかんばせだ。

「食べれば、わかるんですけどね」

「食べれば……？」

月花がべつと舌を出す。

小さな赤色の舌は木苺のように可愛らしかった。

雨流が首を右に傾けると、月花は舌をしまう。

「絶対味覚とか、絶対舌感とか。そう言うらしいです、この舌」

「もしや、そなたも、食べたものの材料がわかるのか？」

「そなたもということは、雨流さんも？」

「うむ。ああ、なんだ、そうか。そなたの店のカレーも、そのほかの料理も。どれも美味で、なおかつ毎回付けが完璧だった。そなたの舌は、すべての味を感じるのだな」

雨流が嬉しそうに笑うも、月花はいい顔をしない。

料理人ならばこの舌は誇りとも言うべきだ。なのに月花には、素直に喜べない理由

があった。

月花の顔が陰しいもの変わる。

「そんなにいいものではないですよ」

「なぜだ。料理人は天職だろう」

「私のは、食べた材料以外のものもわかるのです」

「食べた材料以外、とは？」

「含まれる成分、すべてがこの舌に伝わるのです。無味無臭の毒でさえ、この舌には味として感じます」

ほう、と雨流がうなった。

月花はうつむき、面倒なことです、とつぶやいた。

この舌のせいで、感じたくもない毒や食中毒の成分がわかってしまう。

そう言われれば、と雨流は思い出す。

先程も月花は芋を一口口に入れただけで、芋が食中毒の原因だと断じた。あれは、芋の毒の味を確かめたのだ。

それに思い至った途端、雨流の顔がバツと明るくなる。

「では、今からそなたに確かめてほしいことがある」

「ええ、嫌ですよ。毒ですか？」

「ああ、毒だ。そなた、わたしが助けた恩があるだろう？」

「そういう魂胆で私を助けたのなら、軽蔑します」

「なんとでも言え」

はっは、と笑って、雨流は月花の手を握った。

小さなあかぎれだらけの月花の手に対して、雨流の手のひらは傷一つなかった。つるりとした手が月花を握って離さない。

月花が手を引くも、雨流は月花を逃がさなかった。

「握らずとも、逃げませんよ」

「念のためだ」

ふたりは並んで歩いていく。

五里の道を歩くと都に着いて、段々と、段々と、遠くに見える王宮が近づいてくる。途中から月花も、もしやと思ったのだが、まさか、と懸念を振り払った。

そうして、月花が連れてこられたのは王宮である。

月花は恐縮して、そろりそろりと足音を殺して歩くので精いっぱいだった。

この雨流という人間は何者だろうか。王宮の城門を難なくぐり抜けて、何食わぬ顔で歩いている。

その二人の後ろから、武官らしき男が音もなく歩み寄ってきたことに、月花は気づ

かなかった。

「陛下」

「え、陛下!?」

後ろからの声に月花が振り向くと、先ほどまでは気づかなかったが、この雨流という青年を護衛するように、何人もの武官や内官がぞろぞろと歩いてきている。

十はいるだろうか。みな、ほっとしたように脱力し、ぞろぞろと雨流を取り囲む。

王宮に入ったため、武官も女官も内官も身を隠す必要がなくなり、ようよう雨流の周りに集まってきたのだ。

絹の衣が冬の太陽にきらめいて眩しかった。

「お、お許してください!」

月花はその場に頭を下げて、皇帝陛下に拝礼する。

雨流は頭から被っていた外套を脱ぎ去った。

龍の衣に、冠、簪。黒々した髪の毛は黒真珠のように美しかった。

まるでこの世のものとは思えない出で立ちに、月花はその場にひれ伏した。

先の件で、雨流は腹を下し嘔吐した。

皇帝の身体は皇帝のものであって民のものであり、天のものだ。それを傷つけたとあったのなら、死罪に処されて当然だ。

はっは、と雨流が大げさに笑った。

今日はよく笑うな、と月花は打ち首を覚悟で、「はは……」と引きつった笑いを漏らした。

「よい、そなたに知らせる予定はなかったのだが」

「へ、陛下がわたくしのような平民に、どのような御用でしょう」

「なに、先も言ったではないか。食中毒を調べてほしい、と」

「し、しかし、わたくしのような平民の言葉など、説得力に欠けるかと」

雨流が右手を上げると、内官が月花を立ち上げさせた。

月花は目だけを伏せて、雨流の前に立ちすくむ。

断つても、間違つても、食中毒を証明できなくても、月花の命はないだろう。

しかしそもそも、先の無礼を詫びるのなら、月花も命懸けでそれに応える必要がある。

食中毒を明かせと言うのなら、死んでもそれを証明しなければ。

月花は口を開く。

「へ、陛下……その、食中毒にあった方というのは」

「ああ、わたしの母上だ」

月花は腹をくくった。

ここまでできてしまった以上は、この皇帝陛下に逆らうことはできないだろう。雨流への借りを返すより先に、これは命令なのだと思った。この国の唯一の太陽である皇帝の言葉に逆らえる者はいない。

月花は拱手礼^{きやうしゅれい}をして、「誠心誠意、努めます」震える声で答えるのだった。

厨房に通されて、まず月花は皇太后の食事に使われた食材を見渡した。

その日皇太后に出されたのは、もやしの汁物に、アヒルの肉を蒸してねぎのたれを合わせたもの、それから卵を薄く焼いたものに、魚の甘酢あんかけ。

どれも溪国らしい食べ物だった。

ただし、材料は一級品が揃っており、ここが王宮でなければひとつひとつの食材をくまなく観察して、味見をしたいところだった。

そんな月花に、雨流が説明する。

「肉や魚はお残しになった。皇太后さまは冬が苦手でいらつしやる。冬は寒くて食欲がないゆえ、汁物のみを召し上がった。されど、それで体調を崩された。汁物に入っていたのもやしだけだ」

「なるほど。毒を盛られたのか、もやし自体が毒なのか。ということですね」

「話が早くて助かる」

月花は、もやしを一つ、つまんで目を凝らす。

もやしのひげ根がない。そして、大豆の殻^かも。

これらは調理の際に丁寧に包丁で切ったと言われれば、それはそうだと納得できる。

しかし、本来はそのような方法はとらずに、ひげ根と大豆は手で取るものだ。一本一本手作業ゆえに、もやし料理は手がかかる高貴な料理に使われてきた。

だから、ちぎったような跡が残るのだが、これにはそれがない。

そして、根本には枝分かれしたであろう形跡が認められる。

もやしはすっと一本伸びて育つものであり、それが枝分かれすることはない。

枝分かれした部分をきれいに切り取って形を整えているが、この形は恐らく――

次に月花は、そのもやしをひとつ、口に入れた。

ぴりぴりと舌に感じる味は、先ほどの食中毒のあの芋と同じ成分だった。

苦く、吐き出したいのをこらえた。

月花が舌で感じた味は、紛れもなく毒の味だった。

「やっぱり」

「なんだ、わかったのか」

月花が声を漏らすと、雨流が尋ねる。

「はい。これはもやしではなく、ジャンカルの芋の芽です。意図的に食中毒を起こさ

せたものかと」

「やはりか」

「陛下、私を試しましたね」

月花の言葉に、雨流の顔が曇っていく。

雨流には絶対味覚がある。これがもやしでないことは一目瞭然。

しかし、雨流には確信がなかった。

ゆえに月花に頼んだのだ。

雨流は傍にいた内官に耳打ちして、秘密裏にこの食材を提供したものを探すように指示を出した。

内官、女官が慌ただしく厨房の外に小走りに出ていく。王宮では、走ることは許されない。

だから内官たちは、早歩きでとてとと王宮を飛び出した。

「助かった。月花」

「い、いえ……お役に立てたのなら光栄です」

「うむ。では、のちほど褒美を遣わすゆえ……今日はもう、帰ってよい」

月花は雨流に今一度拝礼して、内官たちに案内されながら王宮を後にした。

ひどく長い一日だった。

命を取られないだけありがたいと思うことにした。

もう、かわり合いは持たないとはいえ、あの冷たいと噂される皇帝は、今日はよく笑っていたし、だけれど莊嚴で輝かんばかりに美しかった。

翌日、月花のもとに遣いがよこされ、言い渡された言葉に月花は言葉を失った。

「李月花。そなたに美人の位を与える」

「なんで!？」

こうして、月花の後宮生活が幕を開けるのだった。

* * *

後宮では皇后を頂点に、女たちがしのぎを削って生きている。

正一品と呼ばれる三夫人。これらは貴賓、貴人、夫人からなる。

その下が正二品である八嬪・淑妃、淑媛、淑儀、修華、修容、修儀、容華、充華。

今回月花が賜ったのは、下から三番目の正四品、美人九人のひとりである。

ちなみに、さらに下には正五品の才人が九人。一番下が中才人となる。

また、その下には長使、少使という、いわゆる女官が続いていく。

月花は皇帝に逆らうわけにもいかず、小料理屋をたたむいとまもなく、後宮に召し上げられた。

月花が後宮にやってきて、与えられた部屋に向かう途中、「なんであんな子が」と、ひそひそと上の位の妃嬪たちが、月花を見てあざ笑っていた。

みな美しく、女官や下女を従えて、羽の扇で口元を隠しながら噂話をするため、どの妃たちが月花をあざ笑っているのか、月花にはわからなかった。

もしかすると、全員なのかもしれない。

妃たちは当然、上等の絹の衣をまとっており、桃色、黄色、水色、青など、目に鮮やかだ。

「そうよね、私みたいな美しくない女が」

月花はそうため息をつく。

月花が後宮に入るにあたって、ひとりの女官と下女がつけられた。

女官は四十はいつているであろう優しい面持ちで、名前を華と言った。月花に對しても嘲笑するどころか、尊敬の眼差しを向けている。

下女はまだ若く、十八歳である月花と同じ年の、気弱な雰囲気である。

おどししながら月花に拱手礼をするも、声がうわづついていた。

「ほ、本日より月花さまのお世話を賜りました、鈴と申します」

「そんなにかしこまらなくていいですって」

「そ、そういうわけには。異例で美人に拔擢された、優秀な側室だとお噂はかねがね」

だいぶ話が大ごとになっているようだった。

月花は頭を抱えてその場に座る。

豪華な椅子は彫刻が施されていて、机には翡翠の龍の置物が置いてある。

煌びやかな天蓋つきの寝台には、西洋の薄織物で飾られている。

月花はこんな堅苦しいところよりも、厨房のような動き回る仕事に性合っている。あの熱気に満ちた空間で、様々なおいに囲まれて、あっちこちの鍋をかき回したい。

「では、月花さま。まずは皇帝陛下にご挨拶に参りましょう」

華女官が月花に恭しくこうべを垂れた。

月花はあわあわしながら華女官によって服を脱がされる。

着の身着のままであがったため、月花の衣はいつもの綿の衣だった。

料理の油のシミがあり、だから妃たちは月花をあざ笑っていたのかもしれない。

「え、え？」

「まずは、衣を着替え、ああ、お化粧も整えませんか。ほら、鈴。髪飾りをお持ちし

なさい！」

華女官は月花を孫かなにかかと思っているらしく、鼻歌交じりに月花を着飾っていく。

絹のすべらかな感触は肌に合わない。

絹は確かに汗を吸うし肌にもいいが、月花は綿のほうが好きだと思った。

綿ならば、いくら汚れても洗えるし、水で洗っても縮んだりしない。

それに比べて絹は繊細で、頻繁に洗うことは叶わない。

料理をするには不衛生だ。

なんてことを考えるうち、月花はあれよあれよと襦袢を着付けられた。

寸法がやや合わない。

月花の身長は平均より低く、胸は大きい。

窮屈な胸が零れそうなのを抑え込んで、華女官は一生懸命月花を美しく仕立てあげた。

「ま、待ってください」

「どうしました？ ああ、この髪飾りはお気に召さず？」

華女官がばんばん、と手を叩くと、鈴が別の髪飾りを持つてくる。

月の形をした簪を見て、「お名前も月花さまですし、これにしましょう」と華女官

が月花の結い上げた髪に、月の形の簪を挿していく。

月花は華女官を見上げる。

「……あの、私はもう、後宮の外には出られないのですか？」

「月花さま!? 月花さまはもう、美人の位なのですよ!? 外になど……それに、もうじき皇帝陛下の皇后選びが始まります。そうなれば、美人である月花さまも、その候補になる可能性は十分にありますか？」

「そ、そんな……」

まるで監獄のようだと思った。

月花はしゅんとうなだれるが、華女官は気にもせず月花の衣を整え、下女が化粧を施す。

実は月花は元々、世界を旅していた。

日がな一日料理を学んでいたから、日焼けすることのない月花の肌は、おしろいなど必要なくらいに白かった。

華女官は化粧される月花の後ろから、金色の冠簪を黒々とした髪の毛に次々と挿していくのだった。

準備を終え、月花は雨流のもとへと向かう。

こうなったのも、あの男のせいだと月花は憤慨ふんがいした。憤慨したところでどうなるわけでもないのだが。

小股こまたで歩くように指示されて、ててて、と速足で歩数が多くなる。

こんな歩き方、月花には似合わない。もつと大股で厨房内をあちこち歩き回るのが月花には合っている。

シャリシャリと衣擦きんすれの音と、揺れる簪が金属音を立てている。

化粧や髪飾りなんて生まれてこの方縁がなかった。それらは料理には不要なもので、だから月花は、興味すらなかった。

月花は皇帝の住む皇宮に足を踏み入れ、皇帝の房部屋の扉を女官が音もなく開け放った。月花は足音を立てないように部屋に入る。

明るい照明が雨流を照らし、笑みを作っているのが見えた。

よく笑う。噂通りなら、冷帝のはずだ。

「来たか」

「……ご機嫌うらわ麗しゆうございます、皇帝陛下」

曲がりなりにも美人である以上、月花は拱手礼をして、周りの女官たちから颯ひんしやく颯くと買わないように精一杯ふるまった。

皇帝——雨流の部屋にはたくさんの上書が積み重なっており、目の下にクマが見

えた。

ざまあみる。いや、今のはなしだ。

雨流はよく頑張っていると思う。

実際、月花が小料理屋を開けたのは、外交に力を入れる雨流の力あつてのことだろう。先々帝の時代には、国外の食べ物を溪国に持ち込むことは禁じられていたのだ。

「ああ、そなたらは下がれ」

雨流が女官、内官たちに冷たく言い放った。

みな震え、しかし内官が口を開く。

「し、しかし、皇帝陛下」

「なに、わたしはこの美人と二人きりで話したい。そう、ふたりきり、です」と内官も女官もぼつと顔を赤らめて、おとなしく部屋から出ていくことにしたようだ。

こうべを垂れて、雨流と目を合わせぬようにささっと部屋を出ていって、部屋の扉が閉まる。

すると雨流は椅子から立ち上がって、月花の目の前へと歩み寄る。

指一本でも触れたら拒んでやろうと月花は思った。

しかし予想外に、雨流は月花の耳元に顔を寄せ——ポツリとつぶやいた。

「折り入って、頼みがあつてそなたを呼んだ」

「頼み……？」

月花も小さく答える。

耳に息が当たってこそばゆかった。

月花は身じろぐことすら許されず、雨流の次の言葉を待った。

内官や女官たちが雨流を恐れていたことから、雨流は噂に違わぬ冷帝なのだろうか。

雨流が声音を低くする。

「半年前のわたしの十八の誕生日に、なにがあつたか、そなたは知っているか？」

そんなこと、一介の平民が知るはずがない。

月花がフルフルと首を横に振ると、雨流はようやく月花から離れて、少しだけ声を大きくした。

やっと耳と頬のむず痒さから解放されて、月花は意味もなく頬に手を当てた。

まだ雨流の吐息で湿っている気がして、月花は思わず頬をぬぐった。

「わたしの誕生日の宴席で、毒が盛られて多くの大臣・諸侯らが倒れた。その毒を、わたしが盛ったのではないかと噂されている」

そこまで聞いて、月花は察した。

つまり、犯人を探せというわけだ。

「それ、私である必要ありましたか？」

どうやら、月花にはれ込んで美人という位を与えたわけではないようだった。

それだけは安心したが、反面腹立たしい。

どうせ自分は、側室の器ではないと言われているような気がして、月花は腹が立ったのだ。

「そなたの料理の腕はそうだが、その舌……その舌があれば、生誕祭の席で毒を盛った者が再びわたしに毒を盛ろうとした時に、いち早く気づける。そう思い、そなたを呼んだ」

「毒見ですか。そう簡単にしつばは出しませんよ。それで、聞くだけ聞きますが、その時の毒の症状は？」

「吐き気、めまい、頭痛。この日出したものはモルゴの乳酸飲料だ」

「乳酸飲料……だったら、それを入れていた容器は？ 金属ですか？」

「そうだ、錫と輝安^{ツチヤス}金を混ぜた合金で、彫刻の美しい器だった。しかし、それらに腐食などなかった」

月花の言いたいところを理解して、雨流がすぐさま否定した。

曲がりなりにも雨流は皇帝である。ある程度は今回の毒の当てがついているらしく、

月花に隠すことなく告げた。

腐食した錫や輝安鉈の合金に酸性の飲み物を入れると、金属が溶け出して食中毒になる。特に輝安鉈だ。しかし、輝安鉈の食中毒であれば――

「毒の症状は吐き気、嘔吐、下痢、頭痛だったか。輝安鉈の食中毒ならば」
雨流の言葉に、月花は頷く。

「はい。それと神経毒です。さらに皮膚がうろこ状になります。しかし、陛下のお話が本当ならば、その毒の症状は、輝安鉈ではないですね」

だとしたら、その日出されたほかの食べ物だろうか。

吐き気や腹痛は、様々な食中毒で起こりうる。

だったら、その日出された乳酸飲料以外が原因と考えるのが自然だろう。

月花は雨流から目を逸らす。

「ほかに出されたものは？」

「月餅と、点心だ」

「どちらも普通のお菓子ですね」

「そうだ。しかし、菓子が出される前に大臣たちは倒れた。つまり、原因は乳酸飲料のほかにない」

だとしても、万が一を考えると実際にその時の食べ物があればいいのだが、それも

いかないだろう。

今は冬。

雨流の誕生日は夏だから、その時の食べ物が残っていたとしても、腐敗しているだろう。

月花の舌は、どんな毒をもあぶりだす。

だから、生誕祭の乳酸飲料さえ手に入れば、すべては丸く収まったのに。食べれば月花には成分がわかる。ならば食べるのが手っ取り早い。

「乳酸飲料はもうないが、月餅と点心の材料はまだある」

「しかし、もう半年前のものになるので、検証しても無意味でしょう」

月花はうむ、と唸る。

なにか当てがあるように感じ、雨流は月花の言葉を待った。

この娘の毒への知識には、目を見張るものがある。

雨流は月花を上から下まで見渡す。

小料理で会った時は気づかなかったが、だいぶ女性らしくて可愛らしい。

顔だって、化粧をすれば美しいし、衣から覗く胸だって、武器になる。

小料理屋で男として振る舞っていたのは、その方が都合がよかったからだろう。女というのはそういう身分だから、月花が男装していたのも頷ける。

しかし、月花が女だと知っていたら、雨流はもつと早くにあ・の・時・の・少・女・だ・と気づけたというのに。

「金属の食中毒に、銅の食中毒というものがありますが、こちらならば、確かに吐き気に腹痛、頭痛などの症状が出るんです。ただ、今回使っているのは輝安鉱ですし」
うー、と頭を悩ませる月花を見て、雨流はふと気を緩めたように息を吐き出して笑った。

それを見て、月花はほう、と思う。

やはりこの皇帝はよく笑う。冷笑ではなく、嬉しそうに笑うのだ。

確かに、そういう五行を整えるために料理を出していたが、それにしても、月花に気を許しているのだろうか。

「なにをお笑いですか」

「いや……そなた、近々行われる、皇后選び。そちらに推挙しようと思つてな」

「え、いや、え、それだけはご勘弁を」

「そんなに嫌か？」

「そりゃあ……私は皇帝陛下の生誕の席での毒の謎を解くためにここに呼ばれただけなのでしょう？」

「そうだ。そして、それを疑われることなく進めるには、美人の位では心もとない。

ゆえに、そなたを皇后としたい」

「ちよ、したい、つて。だいたい、皇后選びには口頭試問があると聞いていますか？」

「そうだな。孟子や孔子の試問は今年はなしにしようと思つていてな。なに、そなたのその賢さならば、先帝もお気に召すだろう」

先帝は二年前に、存命のうちに生前退位した。確実に実子である雨流を皇帝とし、雨流の命を守るためだ。

その先帝にお目にかかるなど、考えただけで月花の顔が青ざめる。

皇帝である雨流にとっては大したことはないのかもしれないが、月花にとっては大問題である。

早く毒の謎を解いて後宮を去りたかったのだが、どうにもそれは複雑で、すぐさまとはいかないのは月花もわかっていた。

わかっているが、自分が皇后なんて、推挙されるだけでも周りの反感を買うのは明らかだった。

「毒の正体は暴きます。なので、皇后選びだけは」

「なに、そう構えるな。形だけの皇后だ。そなたが毒の謎を解いた暁には、廃妃にして、そつと逃がす」

「ええ、でも」

立ち読みサンプル はここまで

「そなた、ジャンカルの芋の食中毒の恩を忘れたか？」

「うっ……それは、それは、皇太后さまの食中毒を明かしたでしょう」

「そなたは、皇帝が身を挺して芋を食して腹を下した恩を、たった一度で返せると思っているのか？」

「そ、そんなあ」

かくして、月花は雨流の妃選びの候補者として、正式に内示が下るのだった。
面倒なことになった。

月花ははあと聞こえないようにため息をついた。

二、カーリー姫

「聞いた？ あの西域かぶれのカーリー姫、皇后候補に入ったらしいわよ」

「聞いた聞いた。どうやって取り入ったのやら。ああ、胸だけは大きいもの、皇帝陛下も物好きよねえ」

月花は居心地の悪さを感じていた。

後宮内に住処を与えられて以来、世話人の下女ですらこのような噂話に花を咲かせる始末で、つまるところ、月花に居場所なんてどこにもなかった。

そもそも後宮の娯楽ときたらこのような噂話くらいであったから、月花は絶好の的だった。

廊下を歩けば嫌味を言われ、他の妃に挨拶をすれば無視された。

それでも月花がめげないから、妃たちは躍起になって月花を無視した。

しまいには、下女たちが月花に挨拶をすると妃たちが折檻するものだから、月花の味方はほぼゼロに等しかった。